

## 京都産業大学と若泉敬の時代（Ⅴ）：独立自尊の顕現と未来への伝言

岩武, 光宏  
拓殖大学：専任職員

<https://doi.org/10.15017/7432642>

---

出版情報：総合文化学論輯. 24, pp.1-28, 2026-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



# 京都産業大学と若泉敬の時代（V）

## — 独立自尊の顕現と未来への伝言 —

岩武 光宏

### はじめに

京都産業大学の創設過程と若泉敬の教育思想を検討してきた本シリーズ（I）～（IV）は、戦前・戦中・戦後を貫く思想的伏流と人的系譜が、いかにして一つの大学の建学理念へと結晶したのかを明らかにする試みであった。とりわけ、総力戦体制、外地（満洲国）における高等教育機関（建国大学）、戦後民主化という「非連続の連続性」の中で形成された知的ダイナミズムは、京都産業大学の建学精神および若泉敬の思想と実践を読み解くうえで不可欠な歴史的文脈である。

同大学が1965年の創設から六十年を迎えた今日、若泉敬の言説と行動は、同時代的証言としての価値を超え、戦後日本の精神史を再検討するための重要な手がかりとして再浮上している。若泉が生涯を通じて追究した「独立自尊の顕現」<sup>1</sup>は、外交思想の範疇にとどまらず、教育、人格形成、国家観にまたがる複合的概念として再定位される必要がある。

### 本稿の目的：若泉思想の再構成と未来への伝言

本稿（V）は、これまでの考察を踏まえ、若泉思想の最終的到達点を「独立自尊の顕現」として再構成し、その理念が京都産業大学の建学精神といかなる接続関係を持ちうるのかを検証することを目的とする。同時に、若泉が残した思想的遺産を、現代日本の教育・社会・国際環境に照らして再評価し、未来への指針として読み替える作業を試みる。すなわち本稿は、若泉敬を「歴史の対象」から「未来への伝言」へと位置づけ直すための理論的枠組みを提示するものである。

本研究シリーズでは、戦前・戦中・戦後を貫く思想的連続体を視野に収めつつ、京都産業大学の創設過程を単なる一私学の制度史ではなく、日本近代の精神史の変容を映し出す縮図として分析してきた。（I）では総力戦体制下の「科学技術」と「道義的精神」の二項構造を抽出し、（II）では戦後新制大学の理念的空洞化への批判的応答としての建学理念形成を検討した。（III）では敗戦後の精神的荒廃と人間性の回復に対する若泉の思想的応答を分析し、（IV）では昭和日本の矛盾と葛藤を背景に、若泉の教育実践が理念の具現化としていかに機能したかを論じた。

これらの分析を通じて明らかになったのは、京都産業大学の建学理念が、戦前・戦中・

戦後という三つの時代区分を横断する「非連続の連続性（continuity in discontinuity）」の過程で生成された複合的・多層的思想構造であるという点である。さらに若泉敬の思想的実践は、国際政治リアリズム・倫理的主体形成・教育的実践という三領域を架橋するものであり、単なる行動者・学者としてではなく、戦後日本の精神構造への批判的介入として理解されるべきである。若泉が問い続けた「我が人生、いかに生きべきか」というテーマは、個人の倫理的課題であると同時に、国家・社会・大学の理念的基盤を問う普遍的問題設定として再解釈されうる。

〔資料1〕本稿（I）～（IV）での戦前・戦後の人脈系譜図<sup>2</sup>

①	②	③
<b>【満洲国（1932-1945）】</b> 満洲国政府・南満洲鉄道 建国大学・総力戦体制の知的中枢 〈思想的源泉〉 ・民族協和／王道楽土 ・知行合一（徳育＋知育） ・統制経済／皇道経済学 ・座談会文化（討議・対話）	<b>【戦後日本（1945-1960）】</b> 満洲人脈が政界・官界・学界に再配置される 〈思想の再生成〉 ・総力戦研究の知的遺産 ・統制経済⇒高度経済成長のモデル ・満鉄改組⇒保守合同（55年体制） ・大戦の省察	<b>【草創期の主要人物】</b> ○ 荒木俊馬（創設者・総長・天文学者） ○ 岩畔豪雄（理事・世界問題研究所初代所長） ○ 小野良介（理事・財務） ○ 作田荘一（相談役） ○ 西内 雅（理事・相談役） ○ 岸 信介（最高顧問） ○ 福田赳夫（理事） ○ 若泉 敬（教育理念の継承）
<b>【主要人物（建国大学）】</b> ○ 石原莞爾（建国大学構想） ○ 作田荘一（建国大学副総長・皇道経済学） ○ 寛 克彦（神道思想家、建国大学創設準備委員） ○ 平泉 澄（思想的影響、建国大学創設準備委員） ○ 江頭恒治（建国大学教員）※戦後は京都産業大学教授 ○ 石田興平（建国大学教員）※戦後は京都産業大学教授 ○ 西元宗助（建国大学教員）※戦後は京都産業大学教授 ○ 黒松 巖（建国大学教員）※戦後は京都産業大学教授	<b>【主要人物（戦後期）】</b> ○ 岸 信介（満洲国官僚⇒戦後首相） ○ 福田赳夫（満洲人脈⇒戦後首相） ○ 岩畔豪雄（陸軍少将⇒大戦の省察） ○ 作田荘一（戦後も大学改革思想を保持） ○ 西内 雅（総力戦研究所⇒教育界へ）	<b>【若泉 敬（1930-1996）】</b> 京都産業大学 法学部 教授 世界問題研究所（第二代所長）を拠点に 研究・教育活動を展開 『未来を生きる トインビーとの対話』刊行 佐藤栄作首相特使（沖縄返還交渉） ジョンソン大統領、ロストフ補佐官 ニクソン大統領、キッシンジャー補佐官 ○ 「志・勇気・信念・愛・知性」を学生に伝える ○ 退職金全額寄付＝教育への献身 ○ 『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』 （1994年5月15日）公刊
<b>【日米交渉（1940-1941）】</b> 宣教師のウォルシュとドラウトが来日 野村吉三郎、岩畔豪雄、井川忠雄が日米奔走 開戦阻止⇒日米交渉決裂⇒日米開戦 〈敗戦・満洲国滅亡〉 戦前・戦中・戦後の非連続的連続性 思想の地下水脈化	<b>【日本国策研究会】</b> 『国策』の執筆陣に荒木俊馬、岩畔豪雄、作田荘一、杭田軍二、江頭恒治が参画 建学のダイナミズムの胎動 〈人的ネットワークの再結集・開学〉 <b>【京都産業大学（1965-）】</b> 戦前・戦中期の知的遺産を継承した「戦後型総合大学」 〈建学の精神〉〈大学設立趣意書〉 ・科学技術、産業立国、教育経国、道義的精神 ・フロンティア精神、世界の中の日本 ・実学と教養の融合	<b>【若泉の教え子・継承者】</b> ○ 吉村信二（最重要証言者） ○ 三縁の会（若泉精神の継承） 〈我が人生、いかに生きべきか〉 独立自尊の顕現

出所：筆者作成

※本図は、満洲国の知的共同体に端を発する人的ネットワークと思想的遺産が、戦後日本の政策形成を経て京都産業大学の建学理念へと再結集した過程を示す。戦前・戦中・戦後の「非連続的連続性」を視覚化し、若泉敬を中心とする思想的継承の構造を明らかにしている。

## 本シリーズの到達点と（V）の位置づけ

本稿（V）以降では、これまでの歴史的・思想史的分析を踏まえ、以下の三点を主要課題とする。

1. 沖縄返還後の余熱（若泉の葛藤と超克）〔本稿〕
2. 現代日本が直面する構造的課題に対する理念的・教育的指標の提示〔次稿（VI）〕
3. アーノルド・J・トインビー思想への傾倒とその思想的展開〔次稿（VI）～（VII）〕

なお本稿は、過去の理念を回顧的に整理することを目的とするものではない。むしろ、歴史的な文脈の中で生成された理念と実践を、戦後80年を経た現代日本の再生に向けた規範的・分析的資源として再構成する試みである。すなわち本稿は、京都産業大学の建学精神と若泉敬の思想的遺産を、現代日本の教育・政治・社会における「未来への指標」として提示するための理論的基盤を構築するものである。

若泉敬に関する研究は、政治外交史・国際政治学・思想史の諸領域にまたがるものの、その全体像は必ずしも体系化されていない。

殊に若泉自身が『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（以下、『他策』という）において沖縄返還交渉の全貌を自ら記述したことにより、研究史は若泉の自己記述を基軸としつつも、その解釈をめぐる多様な視角が提示されてきた。

本稿では、先行研究を踏まえつつも、外交史的分析や核密約問題に偏重しがちな研究傾向に対し、教育者・若泉敬の思想を「独立自尊の顕現」として体系的に再構成するという新たな視座を提示する。とりわけ京都産業大学の建学精神との思想的接続を試みる研究はほとんど存在しない。本稿の学術的貢献は、若泉の行動倫理・修身思想・政治的リアリズムを統合的に分析し、それを戦後日本精神史および大学史の文脈に位置づける点にある。したがって本稿の中心的課題は、若泉敬の「独立自尊の顕現」を思想史的に再構成し、それを京都産業大学の建学精神と接続する理論的枠組みを提示することである。

## 沖縄返還：結果責任と倫理的沈黙 『他策』と『歎願状』

若泉敬の遺書が沖縄県公文書館に寄贈されることが、2025年5月27日付の新聞各紙<sup>3</sup>で報じられた。報道量は多かったものの、その大半は表層的紹介にとどまり、遺書の〈思想的含意〉に踏み込む論考はほとんど見られなかった。「歎願状」が注目を集めた背景には、戦後80年という節目がある。しかし、この遺書には、戦後日本が現在に至るまで抱え続ける構造的課題を照射する重要な思想的契機が内包されている。

「歎願状」〔1994（平成6）年6月23日〕と題された遺書は便箋5枚から成る。これを若泉が「遺書」ではなく「歎願状」と呼んだ理由は、本稿の中心的検討対象である。遺書は、若泉が没する2年前、沖縄県民および大田沖縄県知事に宛てて書かれたものであり、政治的責任、歴史的贖罪、沖縄への帰順、武士道の倫理、そして著作と行動の連動という複数の層が重層的に絡み合った、きわめて複雑な政治思想文書である。

若泉は、戦後日本が喪失した精神的基盤を回復することを自らの「志」とし、その象徴として沖縄を位置づけていた。沖縄の祖国復帰は、精神的・物理的に双方の次元での戦後日本における国民的悲願の象徴であった。

〔資料2〕

歎 願 状

平成六年（一九九四年）六月二十三日

若泉 敬 印

沖縄県の皆様

大田昌秀知事、関係各位殿

私儀

沖縄全戦没者を慰霊する極めて重要なこの日、拙著

「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」の冒頭に記した「鎮魂献詞」を現地沖縄で齋戒して了えました今、拙著の公刊によって沖縄県民の皆様新たな御不安、御心痛、御憤怒を惹き起した事実を切々自覚しつつ、一九六九年日米首脳会談以来歴史に対して負っている私の重い「結果責任」を執り、武士道の精神に則って、国立沖縄戦没者墓苑において自裁します。

その結果、沖縄戦で散華された尊い御霊総てを祀るこの聖地を穢し、かつ沖縄県の皆様、大田知事はじめ関係各位（並びに、お詣りのため私に同行して下さった方々）に甚大なる御迷惑をお掛けいたしますことを御赦し賜わりたく歎願いたします。

唯々申し訳無く存じ、跪拝して只管御宥恕、御慈悲を仰ぐ次第でございます。御詫びするに言葉がありません。

然しながら私は、沖縄県民の皆様の御平安と御多幸をそして沖縄県の御発展を心底より祈念しておりますことを、ここで申し添えさせていただくことを何卒お許し下さい。

猶、身勝手なことを一方的にお頼み申しますが、関係各位に対し、検死後この地沖縄において可及的速やかに荼毘（火葬）に付して下さいますようその御許可を給わり、同行して下さいました各位がその実行をなさっていただきたく、

御願い申し上げる次第でございます。その上、私の遺骨の大部分は直ちに平和祈念公園の摩文仁の海岸から太平洋に流していただきたいと強く希望しております。私の魂魄のこの祈りと希いを御聴許下さいますよう、皆様に合掌し  
歎願いたします。

(以下は全くの私事にて恐縮でございますが、御同行下さいました方々に対し、残りの遺骨若干を郷里にお持ち帰り願って、先祖代々の墓等に納骨していただければ有難いことと存じ上げます。それと関連して更に一言私事を述べさせて頂きますと、私の不動の所信に従い、私の葬儀告別式等は一切無用にて、家族、御友人の皆様のお恩情に深く感謝しながら、それらは全てかつ永久に固く辞退する者であります)

合掌拝礼

追而

この歎願書に、私の住民票、印鑑登録証明書を添付いたします

若泉 敬

出所：吉村信二（「歎願状」の写しは1994年7月17日に若泉より受け取る）  
なお、原本は万年筆での縦書きであるが、筆者が横書きにして改行箇所などは、原本通りとしている。

既述のとおり、若泉は沖縄返還の日米交渉の裏面において中心的役割を果たし、「他策ナカリシヲ」の語が示すとおり、の苛烈な交渉過程を経て返還を実現させた。若泉は、歴史の表舞台に立つ政治家ではなく、歴史の背後で構造を設計する「黒子」として行動した。

沖縄返還交渉の裏舞台において、若泉とキッシンジャーは電話連絡の際に「ドクタージョーンズ」（キッシンジャー）、「ミスター・ヨシダ」（若泉）というコードネームを用い、さらに「相手国首脳を『君の友人』、自国首脳を『私の友人』と呼ぶ」という取り決めを行っていた<sup>4</sup>。秘匿性の維持に最大限の注意を払いながら、両者は緊張の極限にある日々を過ごした。その詳細は『他策』で克明に記録されている。

『他策』を読んでの保阪〔1995〕は、「この首脳会談で果たした若泉の役割は相当に比重が重いように思える。佐藤の外交上の密使という立ち場からまるでプロデューサーのような役割を担っていたかのようだ。若泉の書はその意味で沖縄返還交渉をキッシンジャーと共に「演出、したというようにも読めるほどである」（p.295）と評しているように、交渉の構造を設計し、双方の行動を誘導する“構造設計者（アーキテクト）”であり、これは

映画で言えばプロデューサーに近い。いわば、若泉の役割は単なる「密使」の範疇を超えるものである。

しかし重要なのは、若泉の“演出”が技術的操作ではなく、理念に裏打ちされた倫理的行為であった点である。若泉の行動は、戦後日本の「主体性の欠如」を補完するための思想的実践であった。すなわち若泉は「歴史の舞台に立つ政治家」ではなく、「歴史の舞台を設計する思想家」であったと言える。その代償として、若泉は「核密約」という重き十字架を背負うこととなった。この十字架は、若泉個人が負うべき性質のものではないにもかかわらず、若泉はその全責任を自ら引き受けた。この点こそが、後続節で論じる「結果責任」と「倫理的沈黙」の核心である。

前篇で述べたように、事前協議制度が密約といえるか否かには議論の余地がある。ましてや、この十字架は本来、若泉ひとりが背負うべきものではない。

再び保阪によれば、「これほど自己を滅しようとする感情と、歴史に生きようと覚悟する理性が葛藤している書を私は未だ知らない。—『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』が刊行されたあと、若泉のもとにはあらゆるメディアが取材の連絡をいれた。しかし、若泉は『この書がすべてである』と一切取材に応じなかった。そして、キッシンジャーも沈黙を守りつづけたままである」(p.300)と述べているように、倫理的緊張が顕著である<sup>5</sup>。

筆者の卑見では、若泉は沖縄返還交渉の全責任を一身に引き受け、「自分は歴史の影でよい」という徹底した無私の姿勢を保持していたものと考えられる。本質的には、儒教的修身〔六然(りくぜん)〕・武士道・橋本左内(越前藩士)『啓発録』<sup>6</sup>の「稚心を去る」に通じる。同時に、若泉は「歴史の真実を後世に残す」という強烈な使命感を持っていた。

まさにトインビー的文明観、国際政治学者としての責務、そして“国家の主体性”への希求に根ざすものである。この二つが矛盾するのではなく、若泉の内部で凄まじい緊張関係を保ちながら共存していたのではないだろうか。

前掲のように、保阪が「これほど葛藤している書を知らない」と述べるのは、若泉の修辭が単なる回顧録ではなく、自分の生を賭けた「歴史への奉獻」だったからに違いない。

また、土山 [2025d] は『他策』に「悲壮感が漂っているのはリアリストとして行動した若泉と醒めた thinker 若泉の間に葛藤があったからではないかと私は推測する」

(p.88)と述べているように、内部に秘められた「actor 若泉」と「thinker 若泉」の二重性を指摘している。

総じていえば、若泉は理念と現実の乖離に苦しんだのではなく、理念と現実を一致させようとする「過剰な誠実さ」に苦しんだのではないだろうか。以上を踏まえれば『他策』とは、以下の三つの意義を持つと位置づけられる。

1. 史実の生の記録・・・沖縄返還交渉の真相を後世に残す。
2. 政治思想の表明・・・日本の主体性、日米関係の再定義、戦争の回避という理念。
3. 自己の生の総括・・・若泉自身の倫理・覚悟・修身の結晶。

とりもなおさず、若泉は「語るべきことはすべて書いた」と確信したからこそ、『他策』公刊後の沈黙は「完結の沈黙」となったのであろう。

ここまでを整理すれば、若泉の沈黙は「自己滅却」というよりも、むしろ「理念の純度を守るための倫理的沈黙」であったというべきであろう。すなわち『他策』は“歴史への奉獻”であり、公刊後の沈黙はその完成を意味したのである。そして、若泉の覚悟は、政治家ではなく“思想的行動者”としての覚悟であり、キッシンジャーとの沈黙の共鳴は、外交の倫理を共有した者同士の証にほかならない。さらにいえば、若泉の沈黙は単なる個人の選択ではなく、歴史に対する倫理的責任の表現であったのだ。若泉の生涯は、思想・行動・倫理が完全に一致し、それを貫いたことが評価されるべき特長であろう。

もっとも、本稿が若泉敬の思想的営為を高く評価するあまり、その行動倫理を過度に理想化する危険性についても留意する必要がある。若泉の自己犠牲的行動は、戦後日本の精神的空洞化に対する強烈な批判として理解できる一方で、倫理的純度を絶対視する姿勢は、政治的リアリズムの観点からは危うさを孕む。すなわち、若泉が自らに課した「結果責任」は、国家の意思決定が複数の主体によって構成されるという政治過程の現実を過度に単純化し、個人の倫理的負荷へと収斂させる傾向を持つ。この点において、若泉の行動は倫理的高潔さの証左であると同時に、政治的責任の構造的把握を曖昧にする側面を併せ持つといわざるをえない。

中曽根康弘 [2012] は、晩年の若泉について「私には不可解だった。沖縄返還も実現したし、そういう絶望的な結末になる理由はなかったと思ったがね」(p.191)と述べている。これは一般的な見立てを示した発言といえるが、中曽根と若泉はともに政治学者・矢部貞治を恩師に持つ関係であり、兄弟子として若泉の失望の深層を理解していた可能性も否定できない。いずれにせよ、若泉が沖縄県民への贖罪意識を深めつつ、拭いがたい自責の念に苦しんでいたことは事実である。中曽根のいう「不可解」は、政治家の合理主義から見た当然の反応である。しかし若泉の精神構造は、政治家の合理主義とは異なる次元にあった。

つまり若泉は成果ではなく「純度」で自分を裁いたのである。沖縄への贖罪意識は、政治的責任ではなく倫理的責任だったと考えていたことが窺える。若泉は政治家ではなく、倫理的行動者であり、思想的実存者だった。その苦悩は、政治的成否では測れないものであった。ただし、若泉が重視した“純度”という倫理概念は、政治的妥協を不可避とする政策形成の現実とは緊張関係にある。純度の絶対視は、政治的判断の柔軟性を損ない、前述のように自己犠牲的行動へと傾斜する危険性をともなう。

では、なぜ若泉は純度を絶対視したのか。それは後述する若泉の思想的背景（六然・武士道・啓発録・トインビー）が強く影響しているからである。もっとも、若泉が“純度”を絶対視した背景には、儒教的修身・武士道倫理・近代日本の精神的断層が重層的に作用していた点も看過できない。

後続節では、プライベートにおける若泉に最も近い存在であった吉村信二への聞き取り内容も踏まえ、「歎願状」に込められた思いを読み解く。「歎願状」は若泉の遺書であり、命を賭して伝えようとした己が「心魂」の訴えこそ、その本質である。しかし、「歎願状」の読解だけでは、若泉がなぜここまで理念の純度にこだわり、自己犠牲的行動へと傾斜したのかを十分に説明しきれない。そこで次節以降では、若泉思想の深層にある修身倫理・武士道・トインビー文明観などの思想的源泉を抽出し、その内的構造をも明らかにしていく。

繰り返しになるが、沖縄返還という歴史的偉業における若泉の貢献は大きい。「核密約」が存在したとしても、それは返還実現のための方法論であり、若泉ひとりが背負うべきものではない。若泉の贖罪意識には、国際政治学者・行動者としての高い矜持が鮮明に映し出されている。若泉の理想は「真の日本の独立」、すなわち独立自尊の国家像であった。ゆえに、返還前後の日本の安全保障政策に深い落胆を覚えたのである。

### 戦後日本の精神的空洞化と主体性の喪失

沖縄返還後、日本は米軍基地を沖縄に集中させたまま、米国の傘の下で経済至上主義を突き進んだ。若泉は戦後日本を、物質・金銭万能主義に走り、鎖国心理の中で「愚者の楽園」と化した、と激しく批判した。それは精神的・道義的・文化的に「根無し草」となった状態を意味する。

前篇で触れたように、戦後日本が失ったものは、小林秀雄が吉村に教示した「勇氣」であり、若泉が提唱した「日本のあるべき姿」<sup>7</sup>の三本柱（①再独立の完成、②国家目標の確立、③日米安保の再検討）に象徴される。本質的には、「歎願状」は沖縄県民や大田知事への謝罪と祈りであると同時に、むしろ日本国民と日本政府に対する抗議の書でもあった。端的に言えば、若泉の捨て身の行動は「愚者の楽園」（フールズ・パラダイス）と化した日本への覚醒を促すためであった。若泉が1994年5月15日に『他策』の公刊に踏み切ったのは、沖縄返還交渉の裏面を世に問うためであり、それは「核密約」を明らかにする行為でもあった。若泉自身、国会で参考人招致されることを想定し、日本国の安全保障のあり方を説明する覚悟があり、むしろそれを望んでいた節がある。すべては日本人の覚醒のためであった。

『他策』のタイトルは、明治政府の外相であった陸奥宗光の回想録『蹇蹇録』における三国干渉への対応をめぐる「他策なかりしを信ぜむと欲す」に由来する。沖縄返還の早期実現には「有事における核再持ち込み」を受け入れる以外に選択肢がなかった若泉の状況と重なる。にもかかわらず、若泉はなぜ、日本外交史上に燦然と輝く沖縄返還の裏面を公にしたのか。それは教育者としての捨て身の訴えであったと考えられる。

後藤 [2010] によれば、その動機は、①贖罪として記録を残す、②「真の独立国家」への再生を願う、③研究者としての記録の意義、④現代日本への問題提起、の四点に整理で

きる。とりわけ④は、国家機密の守秘義務違反で告訴される可能性を視野に入れたうえでの行動であり、若泉は国会での証言を望んでいた。

また、吉村が「若泉先生は大学の講義では沖縄問題の核心には触れませんでした。戦後日本のあり方を一貫して憂えていました。そして次代を担う学生には『考えられないことを考え抜く、勇気と実行（Think about the unthinkable）』を大事にしようと力説しました」と述べているように、若泉は「愚者の樂園」と化した日本に警鐘を鳴らし続けたのである。これは、京都産業大学の学生に語った「我が人生、いかに生くべきか」を自ら体現した姿でもあった。しかし『他策』公刊後、沖縄では大きな反響があったものの、首相官邸や外務省など政府中枢は事実上、沈黙で応じた。他方、マスメディアも積極的な政府への真相究明を求める動きは少なかった。

若泉の真意は「核密約」の有無ではなく、独立自尊の国家像をめぐる国民的議論を喚起することにあった。いわば、戦後日本への鉄槌としての捨て身の行動であった。若泉は、沖縄を単なる安全保障の研究対象ではなく、自らの政治的・倫理的責任の焦点として捉えたのである。

結局、若泉が国会に招致されることはなかった。吉村が「若泉先生は、国会での“真剣の刃、による議論ができず、がっかりしていました。国会でも沖縄県議会でも訴え出ることによって『歴史の法廷』に立つ覚悟でした。もし国会招致が実現していれば、自死は考えなかっただろう」<sup>8</sup>と語るように、若泉は戦後日本の墮落を看過できなかったのである。

吉村の証言は、若泉の絶望が政治的失意ではなく、むしろ戦後日本の精神的退廃に対する倫理的失望であったことを示している。若泉にとって国会招致は、自己の正当化の場ではなく、日本がなお主体性を回復しうるかを測る最後の契機であった。ゆえに政府中枢の沈黙は若泉にとって国家が歴史に対して誠実であることを放棄した瞬間として受け止められたのである。若泉の絶望は、政治的敗北の結果ではなく、倫理的主体としての自己が公共圏から応答を得られなかったことに起因する。

すなわち若泉は、戦後日本の「精神的自立の欠如」を自らの生をもって告発したのであり、その行動は「独立自尊の顕現」という理念の最終的な表現であったと考えられる。

実際に政府中枢、政治の要路での反応があれば、相応の行動を起こし続けていた可能性はあったであろう<sup>9</sup>。いうまでもなく第一義には国政に任じる政治家諸氏の覚醒を促すつもりであった。「目を覚まして、世界を見よ」と警鐘を乱打し続けた若泉の倫理的訴求として理解できる。

若泉が命を賭して取り組んだ沖縄返還は、戦後日本国民の悲願であった。それは「核密約」という「他策」なき状況での葛藤の中で成し遂げられた不屈の営みであった。いいかえれば、生命を賭けて国家と歴史に向き合った行動者の思想家であったともいえよう。

とりもなおさず情報公開制度においても、日米の認識には大きな差がある。

石井 [2010] は、米国では政府文書が原則 25 年で公開され、文書は「国民（＝納税

者)」の所有物であるという意識が確立していると指摘する。これは自国の歴史を大切に  
する姿勢の表れである。これに対して日本では、公文書がパブリックな財産であるという  
意識が希薄である。石井は「歴史は自らを、また国の来し方と往く末を照らし出す鏡で  
す。史料の廃棄処分は歴史を検証し、生き方を考えるための手段を奪うもの」(p.53)と  
述べているように、若泉が沖縄返還後の20年余を経て『他策』を世に問うた真意も、ま  
さにこの点にあった。

秘密の「合意文書」を知っていたのは佐藤栄作、ニクソン、若泉、キッシンジャーの四  
人のみであり、外務省は完全に蚊帳の外に置かれていた。正式な外交ルートを通さない以  
上、この事実を歴史の闇に葬るべきか、それとも日本国民が自らの生き方を考える手段を  
奪うことにならないか、この難問に若泉の懊悩は極限に達していた。行動者であり、真の  
教育者でもあった若泉の矜持は、葛藤の末に後者の行動を選ぶこととなる。それは返還後  
も続く米軍基地の依存と負担を目の当たりにして、その失望感が「戦後の未完性」への若  
泉の苛立ちとして次第に自責の念へと転換していったことによる。

若泉の行動は、政治的判断を超えて、教育者としての自己理解と深く結びついた実践と  
して位置づける。すなわち、それは彼が生涯を通じて追究した「独立自尊」の理念を体  
現する、事実上の“最終講義”として解釈することが可能である。

「歎願状」には、「歴史に負う結果責任」をとって沖縄で「自裁」と記されてい  
た。『他策』公刊の翌月に若泉は病軀をおして沖縄を訪問、国立沖縄戦没者墓苑の碑の前  
でぬかずいた。この時、若泉は自裁を思い止まり、『他策』の英訳版を出すことを決意す  
る。世界に「日米関係と沖縄問題」を訴えることが自分に与えられた「天命」だと判断し  
たのである。

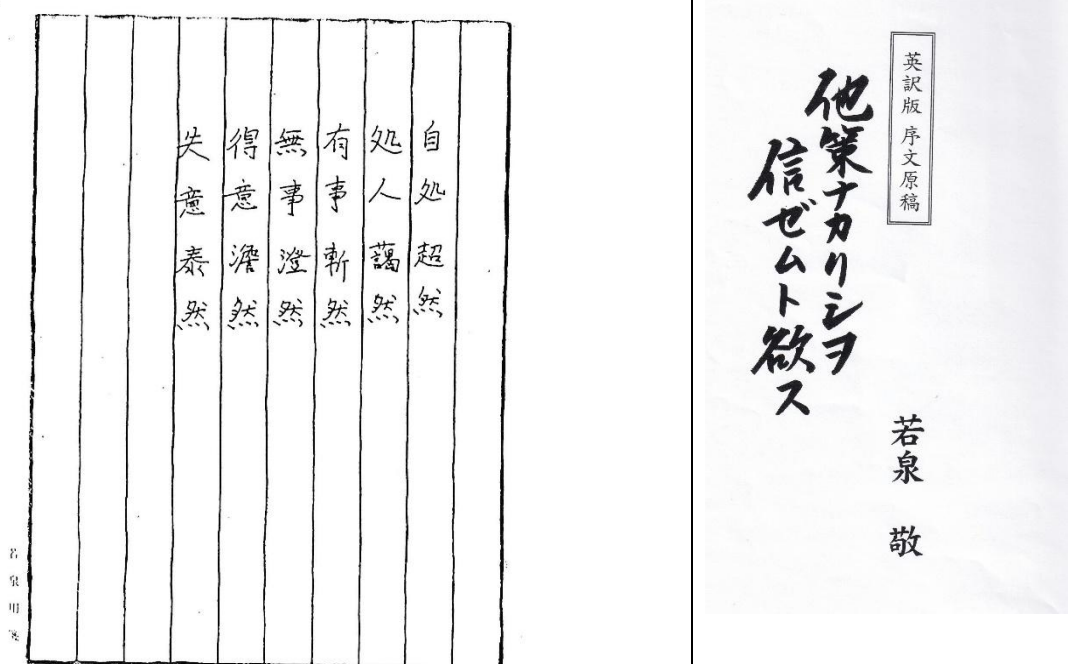
いいかえれば、若泉の行動は、まさに「結果責任」を引き受ける教育者としての最終講  
義であった。一方で行動者としての若泉には、沖縄返還は終わりではなく、むしろ「問い  
の始まり」であった。戦後に失った「精神的自立の欠如」という構造問題に果敢に挑み、  
晩年の病軀をおして訴え続けたことは日本人としての矜持を有する「独立自尊の顕現」と  
いう修辞に収斂される。

### 若泉思想〈若泉イズム〉における修身と行動の統合

『他策』英訳版の序文を執筆するうえで、若泉は1996(平成8)年2月9日から3月4  
日まで沖縄の与那国島に投宿(民宿「ホワイトハウス」)した。この滞在期間中の2月29  
日、京都の吉村に届いた宅急便の中身は琉球泡盛の古酒<sup>10</sup>『どなん』と黒糖であり、さら  
に便箋に認められた「六然」(りくぜん)<sup>11</sup>が封入されていたという。若泉が吉村に送付  
した「六然」は、儒教的修身の要諦を示す処世訓であり、若泉が重視した“自己規律”の象  
徴である。「六然」は、「成功しても驕らず、失敗しても乱れず、どんな状況でも心を整  
える」と解され、若泉の沖縄返還交渉での姿勢そのものと重なるものであった。とりもな

おさず、与那国島より自らの生き方の指針を教え子で京都産業大学の幹部職員となっていた吉村に、「六然」を引用して「熱誠の思い、を伝えたことにほかならない。

〔資料3〕「六然」の書簡と『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（英訳版）序文原稿の表紙



出所：若泉敬からの書簡（吉村信二所蔵文書）

2002（平成14）年6月23日刊行

すなわち、若泉の与那国島より吉村への「六然」送付という行為を思想的に読み解くと、そこには単なる人柄の美談ではなく、若泉思想の核心そのものが凝縮されていることが読み解ける。与那国島から「六然」を送った行為は、若泉が政治的実践の極限で獲得した「生の哲学」を、次代に託そうとした象徴的行為であり、若泉思想（＝若泉イズム）の最も純粋な表現と考えられる。「六然」の六つの心構えは、若泉の政治的行動の背後にある倫理的基盤を明確に示しており、これらは、沖縄返還交渉で若泉が実際に示した態度と完全に一致する。

他方、若泉が「六然」を深く内面化していたことは明瞭であるが、修身倫理が政治的判断に過度の絶対性を与えた可能性も否定できない。くわえて、倫理的純度を重視する姿勢は、政治的妥協を困難にし、自己犠牲的行動へと傾斜する危険性を孕んでいたとも考えられなくもない。

とはいうものの、若泉は「政治的リアリズム」を倫理的自己規律によって制御しようとした稀有な思想家である。これを筆者は「若泉イズム」と表現する。若泉の思想は、抽象

的な理念ではなく、苛烈な実践行動の中で鍛えられた倫理である点に特徴がある。沖縄返還交渉という極限状況、国家機密を抱えた孤独、成功しても名誉を得られない構造、失敗すれば責任を一身に負う立場、このような限界状況で若泉が示した態度は、「六然」の精神そのものであり、行動の中で理念を守るという「実践的倫理」として大いに評価すべきだと考える。

以上を踏まえると、若泉思想は、① 政治的リアリズムを倫理的自己規律で制御する思想、② 行動の中で理念を守る実践的倫理、③ 次代に理念を託す教育者としての思想、④ 主権国家体系の暴力性を理解しつつ、理念を捨てない道徳的リアリズム、⑤ 思想と行動が一致した稀有な政治思想家の系譜、以上のように総括できる。

与那国島からの「六然」は、若泉思想の最も純粋な結晶であり、若泉が生き方そのものを思想として教え子（次代を担う青年）へ伝えようとした証左であった。まさに素顔の若泉とは、行動者というより、最期まで次代の若者を育て続けた真の教育者であったことにほかならない。若泉が示した「生き方」「生きざま」は、今なお多くの人々に影響を与え続けている。

若泉 [2002] 『他策』（英訳版 序文原稿）によれば、鎮魂の祈りは、沖縄への旅を繰り返したのみならず、硫黄島にも訪問している。この二つの戦場での英霊への思いを「彼等の断切の後に幸運にも生き残っている者の義務は、彼らの霊を衷心から弔うと共に、国家の命令に従った行為だったとはいえ彼らの殉じた志と大義を高い次元で受け留め、現世をより良きものとして次の世代に継承し発展させることである、と私は信じている」

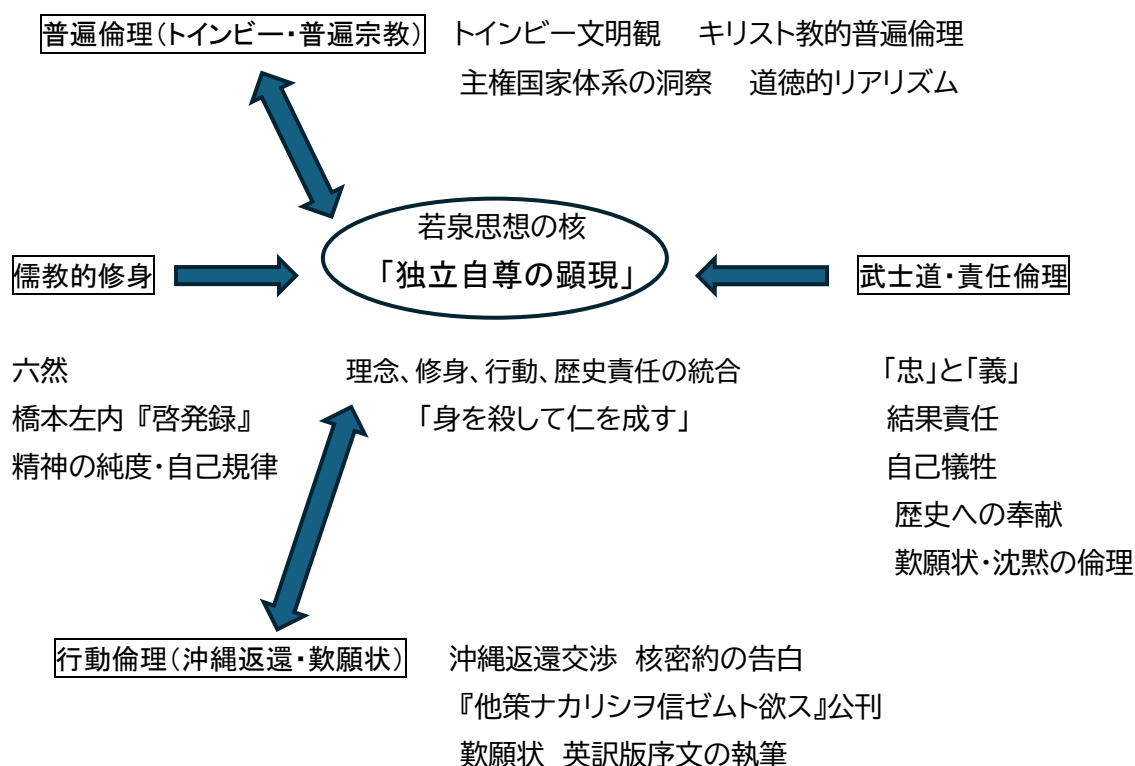
(p.6) と述べているように、行動者はもとより教育者としての若泉の思想・信条が如実に現れている。

さらに筆者が注目するのは、「現状はどうか。主権は最高にして、独立と安全保障、領土の保全は絶対なりと古典的に定義されたいわゆる主権国家が大小合わせて百八十にも及び、それら主権国家の対等平等の原則の上に成り立つ国際社会の基本構造は変わっていない。予見し得る将来、主権に基づく民族国家が発展的に解消され世界連邦や世界国家が成立するような展望を持つことはまず私には考えられない。従って、差し当たってわれわれは、なかんづく諸国家とその為政者たちは、せめて国際連合創設の原点に立ち還り、国連を設立した決意を再確認し、今日まで史上で無数に繰り返されてきた歴史の愚行に終止符を打ち、戦争を無くさなければならない」(p.14) という主権国家体系の限界を直視しつつも、規範的訴えを放棄しない若泉の高邁かつ愚直な姿勢である。

この姿勢は、かつてのトインビーとの対話（1970年6月10日～16日）<sup>12</sup>における内容と矛盾しない。あるいは、トインビーと岩畔が対談（1967年12月12日）<sup>13</sup>した内容とも何ら矛盾しない。若泉の修辞は、世界国家は無理だが、戦争はなくすべきという現実主義と理想主義の折衷を意味している。すなわち主権国家体系の限界を直視しながら規範的平和論を語る希少性であり、日本外交思想における「道徳的リアリズム」の先駆性を帯びて

いる。したがって、理念と現実の断絶を埋めようとする「橋渡しの努力」そのものが価値を持つのである。つまり、現実主義の冷酷さと、理想主義の空虚さの間に立ち、両者を架橋しようとする営為といえよう。

〔資料4〕 若泉思想(若泉イズム)の構造図: 独立自尊の顕現を中心とする四源泉モデル



出所：筆者作成

これは、単なる「理想論」でも「現実主義」でもなく、現実を直視したうえで理念を語るという高度な政治思想的態度であり、日本外交思想史ではきわめて希少であると理解できる。いいかえれば、若泉は制度の限界を知らながらも、理念の価値を守ろうとする態度を示している。この「理念の防衛」は思想史的に重要であり、構造的に不十分であっても、規範的には意義深いものと評価されよう。さらに、若泉は人類が抱える諸問題を挙げたうえで、「しかし、ある意味では、叙上のいずれに比べてもより本質的・根源的な次元において深刻なのは、人間の実存に関わる哲学的問題かも知れない。いま地上では、神は死に、伝統や道徳は衰退し、家族は崩壊に瀕し、金銭物質の欲望追求を至上としながら愚者の楽園に住む人々、彼らの魂は病んでいる、という指摘もある。もしもそれらが的外れでないとしたならば、古来の賢者には、それを癒し心の平安を回復する捷徑は、貪欲、傲慢、猜疑心の虜囚になりがちな人間の、それをもたらず“自己中心性、を統禦することで

あると教える人もいる。そして、感謝と愛は、その最良の特効薬であるだろうという。私はそれに共感を覚える。そこで、喧噪ではなくて静謐のなかで、まず、感謝と愛を籠めた敬虔な祈りを捧げることから始めてみようではないか、と私は提唱したいと思う次第である」(p.16)と己の赤心を吐露していることにほかならない。

この修辞を玩味すれば、それは単なる個人的感慨を超えて、若泉思想の根源に大きく四つの思想的影響が考えられる。

第一は、トインビーの文明史観の影響である。若泉の思想に最も直接的な影響を与えたのは、英国の歴史哲学者アーノルド・トインビーである。前篇でも既述したように、若泉は1970年にロンドンでトインビーと1週間にわたり自然体の対話を重ね、その記録は「未来を生きる トインビーとの対話」として毎日新聞に長期連載(1970年8月24日～同年12月20日、全97回)された。のちに同タイトルで単行本化もされている。この対話は、若泉の精神世界に決定的な影響を与えたと考えられる。

第二は、東洋思想の影響である。前述の若泉が吉村に送った「六然」は、明代の儒者の語録(出典未詳)であり、儒教的自己修養の典型である。若泉は国際政治学者でありながら、精神的規範として儒教的倫理を深く内面化していたといえよう。

第三は、キリスト教的倫理の影響である。若泉はキリスト教徒ではないものの、若き日に志を立て、世界を直視することを誓っている。東大時代にはYMCA寮での寮生活を自ら選んでいるように、キリスト教世界の重要性を認識していた。くわえて、トインビーを通じてキリスト教的倫理観を深く吸収したものと考えられる。トインビーは文明の再生の条件として「愛と自己犠牲」を強調しており、若泉はこれを強く受容したのである。

第四は、越前・若狭にねざした武士道精神の影響である。幕末の越前が生んだ志士であり思想家の橋本左内は、若泉の「立志」における原初的な思想形成に大きく影響している。以上のように、若泉はこれらを「国際政治学者の倫理」として統合し、政治的リアリズムと精神的倫理を架橋する独自の思想を確立したといえよう。

したがって、若泉は歴史の中で理念を守り続ける少数者の系譜に連なるとも考えられる。換言すれば、歴史の中で理念を語ることの困難さと尊さを体現しているとも理解できる。橋本左内の「生きざま」と重なる部分があり、沖縄返還交渉で若泉が示した「自己犠牲的行動」は、左内の思想の現代的継承であると解釈できる。

以上に論じてきた若泉の思想を整理すれば、政治的リアリズムを精神的倫理で制御する「行動倫理」の思想家、文明の危機を精神の危機として捉えるトインビー的文明論の継承者、儒教的自己修養を政治実践に持ち込んだ稀有な存在、祈り・愛・感謝という宗教的語彙を政治思想に統合した独自性、東西の精神伝統を架橋したハイブリッド思想家であるとする特徴が明らかになった。

以上の四源泉モデルによって若泉思想の内的構造が明瞭になったが、問題はこの思想がいかにして京都産業大学の建学精神と接続しうるのかという点である。

次節以降では、若泉が教育者として実践した理念と、同大学の建学精神が共有する思想的基盤を検討する。

### 日米関係の再定義と倫理的基盤

若泉 [2002] における修辞は、単なる感傷ではなく、文明論・倫理学・宗教思想・政治実践が融合した高度な思想的結晶と位置づけるべきではないだろうか。

若泉は「日米の“グローバル・パートナーシップ”を単なるスローガンではなく実効あらしめることは両国の担う責任でもある。私の尊敬するマイク・マンズフィールド元駐日米大使（元米上院議員）の『日米関係は世界で最も重要な二国間関係である、比類（例外）なく』という有名な定義は依然として説得力を持っている。従って、一時の感情的無思慮やことがらの成行委せから、時計の針を再び数十年も前に逆戻りさせて、日米友好の絆を断ってしまうような愚挙は許されない。これこそ、日米両国の英霊たちが死を以って償わされたことである。これこそ、彼らが私たちに『繰り返してはならない』と忠告することなのである」（p.20）と述べており、この修辞には「対米従属の肯定」でも「反米ナショナリズム」でもなく、日米同盟を歴史的・構造的に捉え直しつつ、日本の主体性を「普遍語」で立て直そうとする試みが感知される。

再び前掲 [2002] では、以下のように続ける。「同時に、この際、私は主として日本人読者を念頭に置いて書いた本書日本語版の『跋』において、真に対等な日米関係の抜本的再構築の必要を説いたことに注意を喚起しておきたい。言うまでもなく、いかなる国際間の条約も普遍で永遠ということはある得ない。個人間の友情と異なる。敗戦と占領以来米軍隊がそのまま居座る形で今日までいわば惰性で維持されてきた日米安保条約を中核とする日米友好協力関係を、国際社会の現状と展望のなかで徹底的に再検討し、長期的かつ基本的な両国それぞれの利益と理念に基づいて再定義することは不可避であり、双方にとって望ましくかつ有意義なことであろう。そして、その作業の大前提として私は、まず日本人が毅然とした自主独立の精神を以って日本の理念と国家利益を普遍的な言葉と気概をもって米国はもとより、アジアと全世界に提示することから始めなければならないと信じている」（pp.20-21）と述べているように、若泉思想のリアリズムと倫理、日本人への最後の問いかけが凝縮されている。

まず、若泉は日米の「グローバル・パートナーシップ」を肯定的に語っているが、それを「単なるスローガンではなく実効あらしめる責任」と表現している点が重要である。若泉は、同盟を「与えられた枠組み」として受動的に受け入れるのではなく、両国が“責任をもって中身を作り込むべき関係”として捉え直している。ここには、構造（同盟）を前提としつつ、その運用と理念を主体的に再定義しようとする姿勢が見える。さらに、「日米関係は世界で最も重要な二国間関係である」というマンズフィールドの定義を、若泉はなお「説得力を持つ」と認めている点も注目されよう。このことは、単なる追従ではなく、冷

戦後も依然として日米関係が世界秩序の一つの“構造軸”であるという認識に立っていることを意味している。

〔写真5〕



出所：吉村信二所蔵 左よりトインビー、荒木俊馬、若泉敬

〈1967（昭和42）年8月21日：ロンドン・チャタムハウス玄関前にて佐藤吉昭撮影〉<sup>14</sup>

若泉は、日米関係を「日本の問題」にとどめず、グローバルな秩序構造の一部として捉えている点にも注目したい。そのうえで「日米友好の絆を断つ愚挙は許されない」と述べ、その根拠として「日米両国の英霊たちが死を以って償わされたこと」を挙げるのは、特徴的である。すなわち、若泉は戦没者を「ナショナルな犠牲」ではなく、“二度と戦争を繰り返してはならない”という共同の倫理的遺産として読み替えている。

つまり、英霊を「再軍備・対立の正当化」に使うのではなく、和解と持続的平和の根拠として再解釈しており、もちろん若泉自身の修辞に依拠するものである。この修辞は、英霊の意味を政治的実用性から切り離し、倫理的・精神史的文脈に位置づけようとする若泉の思想的姿勢を示している。このことは、戦争記憶の「倫理的転用」として高く評価されよう。後述する二重の忠誠心（dual loyalty）とも符合する。

くわえて、「いかなる国際条約も普遍で永遠ではない」と明言し、日米安保を「敗戦と

占領以来の惰性で維持されてきた」というように、あくまで日米安保を“聖域化しない”冷静な構造認識があると考えられる。すなわち同盟を絶対視せず、歴史的産物として再検討の対象に置く姿勢である。「真に対等な日米関係の抜本的再構築」を説き、それを「不可避であり、双方にとって望ましい」という点については、対等性を“感情的な自尊心の回復”としてではなく、両国の長期的利益と理念に基づく“構造の再定義”として捉えている点が若泉の特徴であろう。つまり、「対等でないから屈辱だ」という次元ではなく、“対等であれば持続可能なパートナーシップにならない”という構造論に立っているといえよう。

さらにいえば、“自主独立”を単なるナショナリズムとしてではなく、“普遍語で自国の理念と利益を語る能力”として定義し直している。とりもなおさず日本は、「被保護者」としてではなく、「理念と責任を持つ主体」として語れ、と呼び掛けていることにほかならない。それは、「内向きのナショナルな言葉ではなく、世界に通用する普遍語で自国の立場を表現せよ」という大胆かつ繊細な要求である。このことは、日本の思想的未熟さへの静かな、そして厳しい批判として読めるのではないだろうか。

以上のことを整理すれば、1. 日米同盟は世界秩序の中で依然として重要な構造軸である、2. しかし、それは惰性で維持されるべきではない、3. 条約は歴史的産物であり、再定義されねばならない、4. その再定義の前提として、日本が「普遍語で語る主体」とならねばならない、5. 英霊の犠牲は、対立の再燃ではなく、和解と平和の持続を要請している、という解釈となる。要するに若泉は「同盟肯定」ではなく「同盟の思想的再定義」を求めているのである。換言すれば、若泉の真意は「惰性の同盟」から「理念をとまなう同盟」への転換を求めた思想であると考えられる。

また、若泉と親交があったフルブライト [2002] は<sup>15</sup>、「欧州でもそうだが、なぜ日本にいつまでも米軍を駐留させるのか、私にはわけがわからない。戦後処理機関ならまだしも、先進国になった日本に対し、米軍はいつまで保護者顔をして軍隊を置き続けるのか。もっと日本の自主性、自立性を尊重すべきではないのか、日本が米軍の駐留を望んでいるから、との議論があることは知っている。だがそれは決して日米両国にとって、望ましい姿ではないだろう」(p.191)と述べているように、フルブライトの批判が示す「保護者＝被保護者」構造は、若泉が一貫して問題視してきた戦後日本の対米関係の核心と重なる。

若泉は、戦後日本が表向きには「自主独立」を標榜しながら、実際には安全保障の基盤を米国に委ねてきたと批判した。この矛盾した姿勢が、日本の主体性形成を阻害し、国家としての成熟を妨げたと捉えていたのである。若泉が繰り返し強調したのは、日本が自らの安全保障観を形成しない限り、日米関係は永遠に“対等な同盟”にはなりえないという構造的な問題である。

フルブライトの言葉は、この若泉の問題意識を外側から照射するものとして読むことができる。すなわち、米国側の知識人でさえ、日本の自立性の欠如と、それを温存する日米関係の惰性に疑問を呈していたという事実である。若泉が「日本の主体性の空洞化」と呼

んだ現象は、単に日本国内の政治文化の問題ではなく、「日米双方が戦後秩序の慣性」に依存し続けた結果として生じた構造的な問題であった。

さらに、若泉が沖縄返還交渉で痛感したのは、米国が日本を「戦略的従属国」として扱うのではなく、日本自身はその位置に安住してしまうという二重の構造である。フルブライトが述べた「日本が米軍駐留を望んでいるから、という議論がある」という指摘は、まさに若泉が批判した“依存の自己正当化”と重なる。日本側が主体的に安全保障を再設計する努力を怠ることで、米国側の「保護者的態度」を逆に強化してしまうという悪循環である。この点で、フルブライトの批判は若泉の議論を補完する。若泉が内側から見た「日本の主体性欠如」という問題を、フルブライトは外側から「米国の過剰な保護者意識」として捉えたのである。若泉が求めたのは、米国への反発ではなく、日本自身が自らの安全保障と国際的役割を主体的に語り直すことであった。フルブライトの批判は、その語り直しが国際社会からも期待されていたことを示している。すなわち日米関係の成熟とは、米国の保護者性を弱めることではなく、日本が自らの主体性を取り戻すことによるのみ達成される。

### 若泉とトインビーの「第三の道」

かつてトインビーは、二十一世紀初頭に人類が直面するであろう二つの選択肢として、1つは核戦争によって自らを滅亡させる可能性、他の1つは、より小さい悪として人類が“世界的独裁制、に屈服することであると予測した。この二つとも決して望ましいものではなく、トインビーは「第三の道」を探求すべきことを以下のように訴えたという。

「今日、全世界のすべての人々に二重の忠誠心（dual loyalty）が求められています。第一は、自分が生れ育った祖国への自然な忠誠心であり、いま一つは人類全体の生き残り、安全、福祉のための理想的な忠誠心です。

前者は多分に感情的であるために、偏狭で盲目的な愛国心に陥らないようコントロールしながら、われわれが意図的に開発すべき後者との適切な調和と両立を図ることに、英知と想像力を傾注しなければなりません。（後略）」<sup>16</sup>というトインビーの言葉に、若泉は深く共鳴している。これについて後年、若泉と吉村は議論（師弟の対話）している。

吉村は「先の大戦でアメリカ日系人部隊（第442連隊）の兵士（本人たちは米国籍を有しながらも）は、父母、祖父母の祖国である日本との『二つの祖国』と『二つの忠誠心』を有していたことが考えられます。彼らは、その二つを信じて勇敢に戦っています。戦後37年を経た今こそ、アメリカ日系人部隊の再考察が必要ではないでしょうか」と祖国愛と忠誠心に光を当てる重要性を主張した。

これに対して、若泉は「トインビー博士の生前中にお尋ねしたかった大事な命題ですね」と応え、さらに「アメリカ日系人部隊の兵士は、二つの祖国と二つの忠誠心を心奥に抱き、まさしく道義を尽くさんとした武士（もののふ）だったのです」と深く同意したと

いう。

アーノルド・J・トインビー、若泉 [1971] では、トインビーが「地域的主権国家の国民は、自国の主権を放棄し、それを文字どおり全世界にまたがる世界政府の最高主権に従属させなければならないでしょう。（中略）私が意味しているのは、個人と共同体の双方における自己中心性の克服ということです。（後略）」（p.277）と述べたことに対して、若泉は「私は、完全な世界の調和を実現するために、人間の精神的復活の必要性に述べたあなたの見解に賛成です。（後略）」（p.278）と応じており、人類が平和を希求するうえで、鍵となる概念を示唆している。

〔写真6〕



出所：吉村信二所蔵 左より岸信介、小野良介、若泉敬、荒木俊馬

〈1967（昭和42）年5月4日：京都産業大学本館玄関前にて山本吉男撮影〉<sup>17</sup>

若泉がトインビーの「dual loyalty」に共鳴した理由は、「日本という祖国への献身」と「人類文明の危機への自覚」という二つの軸を常に抱えていたからにほかならない。さらにいえば、若泉は“国家のために働く政治学者”であると同時に、“文明のために祈る思想者”という二重の自己像を持っていたともいえよう。それを統合したものが「教育者・若泉」であった。いわば、トインビーの「dual loyalty」は、若泉の内的構造を言語化してく

れる“鏡”の役割を果たしたとも考えられよう。

吉村の指摘に対して、若泉は「まさしく道義を尽くさんとした武士（もののふ）だった」と応じている点にも若泉思想の独自性が現れているのではないだろうか。442 連隊の兵士は、米国への忠誠（法的・政治的）、そして日本への情緒的・文化的忠誠を同時に抱えながらも道義を尽くしており、若泉はそこに、「忠」と「義」を両立させる武士道精神構造を見出したのである。

つまり、トインビーは「dual loyalty」を“文明史的課題”として語っており、若泉はそれを「武士道の倫理」として読み替えたのである。すなわち、トインビーの普遍的倫理と武士道の日本的倫理を接続させたのである。踏み込んでいえば、トインビーの「第三の道」は、文明の存続のための“構造的選択”である。しかし若泉はそれを、「人間の魂のあり方」として受容している。したがって、若泉の「第三の道」は、文明論、修身論、武士道、宗教的倫理が融合した独自の思想であると理解できる。

さらにトインビーの訴える「第三の道」とは、京都産業大学の建学精神とも通底するものであり、学歌（荒木俊馬作詞・團伊玖磨作曲）で謳われる「— 有りと有る全人類の／幸福と平和の為に／わが命捧げて惜（く）いぬ／現身（うつしみ）の形造りに／われら励まむ」の一節にも接続していると考ええる。

往時の若泉は、「dual loyalty」を京都産業大学の建学精神に重ね合わせ、「第三の道に生きる人材」を育てることを念頭において学生教育に邁進していたのではないだろうか。

ただし、本稿が試みた若泉思想と京都産業大学の建学精神との接続については、その思想的連続性を強調しすぎることには注意が必要である。両者の間には確かに共通する理念的基盤が存在するものの、若泉の思想は個人の実存的葛藤に根ざしたものであり、大学の制度的理念とは、そもそもの性格を異にする。

したがって両者の接続は、あくまで思想史的・解釈学的レベルでの構築である。ゆえに歴史的因果関係として断定すべきものではなく、むしろ草創期において同大学の建学精神を若泉思想〈若泉イズム〉によって補完かつ敷衍して往時の学生へ広く浸透させたことを評価すべきであろう。

### おわりに 若泉思想〈若泉イズム〉の再定位と独立自尊概念の理論的射程

本稿では、沖縄返還後の若泉敬が抱えた倫理的葛藤と、その思想的昇華の過程を分析対象とし、若泉思想の最終的構造を「独立自尊の顕現」として再構成した。若泉にとって沖縄は、外交交渉の一局面ではなく、戦後日本の精神的未完性を可視化する象徴的領域であり、同時に自身の倫理的責任を引き受ける場として位置づけられていた。この点において、「歎願状」は沖縄県民への謝罪の書簡であると同時に、戦後日本の主体性欠如に対する批判的介入として理解されるべきである。

若泉が追究した「独立自尊」は、政治的スローガンに還元されるべき概念ではなく、個

人の修身、国家理念、国際秩序の構造的な理解を包含する多層的概念である。与那国島から教え子に送付された「六然」は、若泉が極限状況において形成した倫理的自己規律の核心を示すものであり、理念と行動の一致を要請する若泉の思想的態度を端的に表象している。若泉の政治的リアリズムは、倫理的規範によって制御される「道徳的リアリズム」として特徴づけられ、これは戦後日本の政治思想史において特異な位置を占める。

しかし「道徳的リアリズム」という概念は、倫理と権力政治の統合を前提とする点で理論的緊張を孕む。国際政治の現実には、必ずしも倫理的規範と整合しないため、若泉の思想は規範的魅力を持つ一方で、実践的妥当性には検討の余地が残る。

さらに、若泉思想は京都産業大学の建学精神との間に思想的連続性を有する。同大学の理念は、戦前・戦中・戦後を貫く「非連続の連続性」の中で生成された複合的構造を持つが、その中心に据えられた「将来の社会を担って立つ人材の育成」は、若泉が学生に提示した主体形成の要請と深く共鳴する。若泉の行動倫理は、建学精神を現代的文脈において再解釈するための媒介概念として機能し、大学史研究における思想史的分析の有効性を示す事例ともなっている。とはいうものの、京都産業大学の建学精神と若泉思想との関係は、直接的な因果連鎖として理解されるべきではない。むしろ両者は、同時代的な精神的課題に応答する過程で、それぞれ独自に形成された理念が思想史的地平において交差するものである。したがって本稿が論じる接続は、歴史的因果を主張するものではなく、理念的共鳴を析出する解釈学的試みである。

また若泉思想は、戦前・戦中・戦後を貫く精神的断層の中で形成された歴史的条件性を強く帯びている。総力戦体制、占領改革、冷戦構造、そして沖縄返還という歴史的局面は、若泉の倫理的主体形成に決定的影響を与えた。若泉が希求した「真の独立国家」像は、戦後日本の未完性を鋭く突く批判的視座であると同時に、冷戦期の国際秩序と日米安保体制という特定の歴史的な文脈に深く規定されていた。それゆえに若泉思想は普遍的理念を志向しつつも、その形成過程はきわめて歴史的であり、特定の時代的制約の中で生まれた思想的産物であることを見失ってはならない。

他方、若泉が批判した戦後日本の構造的な問題—主体性の欠如、物質至上主義、国際秩序への無関心—は、今日においてもなお解消されていない。若泉が『他策』の公刊に踏み切った背景には、過去の贖罪ではなく、現代日本社会に対する規範的問題提起が内在していたと考えられる。若泉の行動は、大学教育の枠を超え、日本社会全体に向けた倫理的警鐘として位置づけられるべきである。

本シリーズ（Ⅰ）～（Ⅴ）を通じて明らかになったのは、京都産業大学の創設史が、日本近代の精神的変容を映し出す一つの縮図であるという点である。総力戦体制、建国大学の理念の実験、敗戦後の精神的荒廃、新制大学の制度的空洞化、高度経済成長期の価値転換といった歴史的断層を貫く思想的伏流が、若泉敬という行動者の内部で一つの思想的結晶を形成した。本稿は、その結晶を「独立自尊の顕現」として再定位し、建学精神との

思想的接続を提示した。

次稿（VI）では、若泉が指摘した戦後日本の構造的課題を、現代の教育・政治・社会の文脈に照らして再検討し、理念的・教育的指標として提示する。また（VI）～（VII）では、若泉が晩年に傾倒したアーノルド・J・トインビーの文明論を参照しつつ、若泉思想の普遍化とその理論的射程を検討する予定である。

さらに若泉が黄泉に旅立つ4日前、吉村に手交した52文字の「心魂」のメッセージを手がかりに、「道義・正理」を守りて身を棄つる生き方と、その死生観「我が人生、いかに死すべきか」を読み解く。若泉が遺した思想的遺産を「未来への伝言」として読み替える作業は、現代日本の主体形成にとって不可欠の課題である。

以上の考察を踏まえるならば、「独立自尊の顕現」は単なる歴史的回顧ではなく、未来に向けた規範的要請として理解されるべきである。若泉敬の思想と行動は、戦後日本の精神史における重要な参照点として、今後も継続的な理論的検討を要するであろう。

本稿で明らかにした若泉思想の構造と倫理的課題は、現代日本が直面する構造的危機を読み解くうえでも重要な示唆を与える。次稿（VI）では、若泉の思想を手がかりに、現代日本社会の制度的・精神的課題をどのように再定義しうるのかを検討する。

#### 参考文献

- 会田周平 [2012]、『中村天風と「六然訓」変革を実現する哲学』、PHP 研究所
- アーノルド・J・トインビー、若泉敬 [1971]、『未来を生きる トインビーとの対話』、毎日新聞社
- アーノルド・J・トインビー、若泉敬 [1977]、『未来を生きる トインビーとの対話』、講談社
- 荒木俊馬 [1955]、『わが、アメリカに降伏せざるの記』、『新論 八月号』、新論社、pp.124-129
- 荒木俊馬 [1957]、『巻頭言 二つの外交使節』、『国策 五月号』、日本国策研究会出版部、pp.2-3
- 朝日新聞（2022年9月7日付、2023年1月20日付、若泉敬、吉村信二の記事）
- 朝日新聞（2021年8月11日付配信、<https://www.asahi.com/articles/ASP893W3SP87PITB00N.html>）「自決前、大田中将が海軍次官にあてた電文（全文）」
- 藤田直央 [2023]、『徹底検証 沖縄密約 新文書から浮かぶ実像』、朝日新聞出版
- 学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学－建学の心をたずねて』、学校法人京都産業大学
- 学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学－建学の心をたずねて』、WEB版（<https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/kenkokoro.html>）、2025年12月3日閲覧
- 学校法人京都産業大学 [2004]、『京都産業大学 教学之源流』、学校法人京都産業大学大学史編纂室
- 学校法人京都産業大学 50年史編集委員会編 [2015]、『学校法人京都産業大学 50年のあゆみ』、学校法人京都産業大学（[https://www.kyoto-su.ac.jp/about/ahcetq0000000sdb-att/2016\\_50th.pdf](https://www.kyoto-su.ac.jp/about/ahcetq0000000sdb-att/2016_50th.pdf)）、2025年12月3日閲覧

- 学校法人京都産業大学 50 年史編集委員会 [2023]、『学校法人京都産業大学 50 年の歴史（一）前史編—京都産業大学の誕生—』、学校法人京都産業大学  
([https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/omg884000001ls1-att/50th\\_history01.pdf](https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/omg884000001ls1-att/50th_history01.pdf))、2025 年 12 月 3 日閲覧
- 後藤乾一 [2010]、『「沖縄核密約」を背負って 若泉敬の生涯』、岩波書店
- 橋本恵 [1999]、『謀略』、早稲田出版
- 橋本恵、橋本圭司（改訂） [2025]、『誠と謀略 岩畔豪雄の知られざる日米和平交渉の記録』、心のともしび企画
- 保阪正康 [1994]、『若泉敬著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』に記された沖縄返還『核』持ち込みの密約』、『文藝春秋・六月号・目次』、文藝春秋、pp.94-105
- 保阪正康 [1995]、『さまざまなる戦後』、文藝春秋
- 保阪正康 [2005]、『あの戦争は何だったのか 大人のための歴史教科書』、新潮社
- 保阪正康 [2025]、『なぜ日本人は間違えたのか 真説・昭和 100 年と戦後 80 年』、新潮社
- 林千勝 [2015]、『日米開戦 陸軍の勝算 「秋丸機関」の最終報告書』、祥伝社
- 猪瀬直樹 [2020]、『昭和 16 年夏の敗戦 [新版]』、中央公論新社
- 石井修 [2010]、『ゼロからわかる核密約』、柏書房
- 石原莞爾 [2019]、『世界最終戦争論 [新書版]』、毎日ワンス
- 岩畔豪雄 [1967]、『戦争史論』、恒星社厚生閣
- 岩畔豪雄 [1970]、『科学時代から人間の時代へ』、理想社
- 岩畔豪雄 [2015]、『昭和陸軍謀略秘史』、日本経済新聞出版社（「岩畔豪雄氏談話速記録」（日本近代史料研究会、1977 年刊、非売品）の改題）
- 岩畔伸夫 [1970]、『追想起』、私家版
- 岩武光宏 [2020]、『戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察—A I 時代と岩畔豪雄の省察—』、『東京交通短期大学研究紀要』、第 25 号、東京交通学会、pp.71-86
- 岩武光宏 [2023a]、『京都における学都形成過程 —磁場の形成とその系譜—』、『東京交通短期大学研究紀要』、第 28 号、東京交通学会、pp.154-168
- 岩武光宏 [2023c]、『第 25 回総合文化学会（リモート）シンポジウム（口頭発表）教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義 —フィールドワークの実践（校歌の原風景を訪ねて）—』、『総合文化学論輯』、第 19 巻、総合文化学研究所、pp.71-96
- 岩武光宏 [2023d]、『京都産業大学と若泉敬の時代(I): 科学技術と道義的精神』、『総合文化学論輯』、第 19 巻、総合文化学研究所、pp.1-19
- 岩武光宏 [2024]、『京都産業大学と若泉敬の時代(II): 理想の大学を求めて』、『総合文化学論輯』、第 20 巻、総合文化学研究所、pp.17-36
- 岩武光宏 [2024]、『京都産業大学と若泉敬の時代(III): 戦後日本と人間性の回復』、『総合文化学論輯』、第 21 巻、総合文化学研究所、pp.1-18

- 岩武光宏 [2024]、「教育者・若泉敬外伝—教育思想伝承のかたち—」、『知の悦び：総合文化学の確立へ』、中川書店、pp.37-65
- 岩武光宏 [2024]、「京都産業大学と若泉敬の時代 (IV)：昭和日本の矛盾と葛藤」、『総合文化学論輯』、第 23 卷、総合文化学研究所、pp.53-75
- J・W・フルブライト、(訳) 勝又美智雄 [2002]、『権力の驕りに抗して』、日本経済新聞社
- 加地伸行 [2015]、『儒教とは何か 増補版』、中央公論新社
- 河田宏 [2002]、『満洲建国大学物語』、原書房
- 河原仁志 [2022]、『沖縄 50 年の憂鬱 新検証・対米返還交渉』、光文社
- 川合全弘 [2017a]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (上)」、『産大法学 50 卷 1・2 号』、pp.221-239
- 川合全弘 [2017b]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (中)」、『産大法学 51 卷 1 号』、pp.27-43
- 川合全弘 [2018]、「京都産業大学世界問題研究所五十年外史 1966～2016」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 33 卷、pp.1-51
- 川合全弘 [2019]、「一軍人の戦後 —岩畔豪雄と京都産業大学— (下)」、『産大法学 53 卷 2 号』、pp.1-74
- 川合全弘 [2021]、「科学技術の発展と人類社会の変化—就任の挨拶に代えて (1) —」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 36 卷、pp.175-176
- 川合全弘 [2023]、「プロジェクトを振り返って」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 38 卷、pp.121-131
- 川合全弘 [2024]、『京都産業大学世界問題研究所関連資料 京都産業大学史論集』、京都産業大学世界問題研究所
- 岸俊光 [2019]、『核武装と知識人 内閣調査室でつくられた非核政策』、勁草書房
- 岸俊光 [2019]、『内閣調査室秘録 戦後思想を動かした男』、文藝春秋
- 岸俊光 [2025]、『内調 — 内閣情報機構に見る日本型インテリジェンス』、ちくま書房
- 北岡伸一、波多野澄雄、河野康子、坂元一哉、佐々木卓也、春名幹男 [2010]、『いわゆる「密約」問題に関する有識者委員会報告書』、有識者委員会
- ことわざディクショナリ (<https://kotowaza-dic.com/>)、2026 年 3 月 15 日閲覧
- 京都産業大学同窓会事務局 [2022]、『むすび』京都産業大学同窓会報第 58 号
- 京都産業大学ホームページ (<https://www.kyoto-su.ac.jp>)、2026 年 3 月 15 日閲覧
- 京都産業大学広報課 [1976]、『京都産業大学報』(1976 年 10 月 25 日)、通第 61 号、京都産業大学
- 桑原亮人 [2006]、「“志、に生きた建国大学」、『同文書院記念報 vol.14』、愛知大学東亜同文密院大学記念センター、pp.18-28
- 小林英夫 [2005]、『満州と自民党』、新潮社
- 古関彰一 [2025]、『虚構の日米安保 憲法九条を棚にあげた共犯関係』、筑摩書房

毎日新聞 (2015 年 12 月 22 日付、岩畔豪雄の記事)

牧野邦昭 [2019]、「『英米合作経済抗戦力調査』(陸軍秋丸機関報告書)(特集 東京大学経済学図書館所蔵貴重図書の研究)」、『東京大学経済学部資料室年報』、第 9 号、pp.1-14

三上一夫、伴五十嗣郎、笠島清治、坂井敬市、山田敏文 [1990]、『少年、君たちはどう生きるか 橋本左内先生の「啓発録」に学ぶ』、青少年育成福井県民会議

三浦英之 [2015]、『五色の虹 満州建国大学卒業生たちの戦後』、集英社

宮脇淳子 [2019]、『満洲国から見た近現代史の真実』、徳間書店

宮沢恵理子 [1997]、『建国大学と民族協和』、風間書房

宮沢恵理子 [2006]、「講演記録 満洲にあった建国大学」、『同文書院記念報 vol.14』、愛知大学東亜同文密院大学記念センター、pp.4-17

溝部英章 [2017]、「本学建学の精神と法学部の使命(1)」、『産大法学 50 卷 1・2 号』、京都産業大学法学会 編、pp.257-280

溝部英章 [2015]、「京都産業大学建学の理念——その三つの源泉：荒木俊馬、作田壯一、若泉敬」、『発表概要』、([https://www.kyoto-su.ac.jp/project/kikou/sekaimondai/kenkyu/20151028\\_kenkyu.html](https://www.kyoto-su.ac.jp/project/kikou/sekaimondai/kenkyu/20151028_kenkyu.html))、2025 年 8 月 3 日閲覧

内閣府ホームページ (<https://www5.cao.go.jp/keizai3/keizaiwp/index.html>)、2025 年 8 月 11 日閲覧

中曽根康弘(編者：中島琢磨、服部龍二、昇亜美子、若月秀和、道下徳成、楠綾子、瀬川高央) [2012]、『中曽根康弘が語る戦後日本外交』、新潮社

日本経済新聞 (2015 年 8 月 9 日付、「日曜に考える」、「沖縄返還の功罪」の記事)

沖縄県公文書館ホームページ (<https://www2.archives.pref.okinawa.jp/opa/searchpics.aspx>)、2025 年 12 月 3 日閲覧

沖縄県酒造組合ホームページ (<https://okinawa-awamori.or.jp/>)、2026 年 3 月 21 日閲覧

作田壯一 [1934]、『國民科學の成立 國民精神文化研究 第一年 第四冊』、國民精神文化研究所

櫻澤誠 [2015]、『沖縄現代史 米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』、中央公論新社

三縁の会ホームページ (<http://www.san-en.org>)、2026 年 3 月 3 日閲覧

産経新聞 (2022 年 5 月 25 日付、若泉敬、吉村信二の記事)

佐藤達也 [2011]、「発表 4：満州建国大学出身、愛大 25 年卒」、『オープン・リサーチ・センター年報 第 5 号 2010 年度版』、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、pp.22-27

信夫隆司 [2012]、『若泉敬と日米密約 沖縄返還と繊維交渉をめぐる密使外交』、日本評論社

坪内隆彦 [2009]、「日本文明の先駆者 19 作田壯一」、『月刊日本 6 月号』、K&K プレス、pp.76-83

寺師睦宗 [1996]、『安岡正篤「やりたいこと」を必ずやり遂げる生き方』、三笠書房

東京大学経済学図書館・経済学部資料室デジタルアーカイブ〔秋丸機関関係資料『英米合作経済抗戦力調査』其 1〕、([https://ut-elib.sakura.ne.jp/digitalarchive\\_02/rare/5512339978.pdf](https://ut-elib.sakura.ne.jp/digitalarchive_02/rare/5512339978.pdf)) 2025 年 8 月 31 日閲覧

東京大学経済学図書館・経済学部資料室デジタルアーカイブ〔秋丸機関関係資料『英米合作経済抗戦力調

査』其2)、([https://ut-elib.sakura.ne.jp/digitalarchive\\_02/rare/5513690858.pdf](https://ut-elib.sakura.ne.jp/digitalarchive_02/rare/5513690858.pdf)) 2025年8月31日閲覧

土山實男 [2025a]、「日本のリアリズム — 日本は国際政治の現実をいかに把握し、どう動いたか第17回 第8章(上)「沖縄返還と戦後の終わり一核なき日本の安全保障を探究した若泉敬」、『アジア時報 3月号』、一般財団法人アジア調査会、pp.31-53

土山實男 [2025b]、「日本のリアリズム — 日本は国際政治の現実をいかに把握し、どう動いたか第18回 第8章(中)「沖縄返還と戦後の終わり一核なき日本の安全保障を探究した若泉敬」、『アジア時報 5月号』、一般財団法人アジア調査会、pp.72-89

土山實男 [2025c]、「日本のリアリズム — 日本は国際政治の現実をいかに把握し、どう動いたか第19回 第8章(下)「沖縄返還と戦後の終わり一核なき日本の安全保障を探究した若泉敬」、『アジア時報 6月号』、一般財団法人アジア調査会、pp.8-37

土山實男 [2025d]、「日本のリアリズム — 日本は国際政治の現実をいかに把握し、どう動いたか第21回 第9章(下)「国際政治のリアリズムと日本」、『アジア時報 6月号』、一般財団法人アジア調査会、pp.59-96

若泉敬 [1994]、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』、文藝春秋

若泉敬 [2002]、『英訳版 序文原稿 他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』、〈非売品〉

山本英治 [2004]、『沖縄と日本国家 国家を照射する〈地域〉』、財団法人東京大学出版会

山本英輔 [1939]、『愈々国家総力戦 普及版』、帝国軍事協会

山之内靖(編)、ヴィクター・コシュマン、成田龍一 [1995]、『総力戦と現代化』、柏書房  
読売新聞(2022年5月1日付、若泉敬、吉村信二の記事)

吉村信二 [2017]、『若泉敬先生に学ぶ』、私家版

写真5 ロンドンにて、トインビー、荒木俊馬、若泉敬(吉村信二所蔵)

写真6 京都産業大学本館前にて、岸信介、小野良介、若泉敬、荒木俊馬(吉村信二所蔵)

---

<sup>1</sup> 吉村によれば、若泉は「独立自尊の顕現」という言葉を好んで使っていたという。かつて福澤諭吉は「独立自尊」という語は明確に述べているが、これを若泉は時代に即しながら敷衍した形で表現していたことが窺える。そして「顕現」という語でまとめるのは若泉の強い意志力が感じられる。

<sup>2</sup> 本図は、満洲国において形成された知的共同体と政策研究ネットワークが、敗戦後の制度的断絶を経てなお、人的・理念的・制度的諸要素として再編成され、戦後日本の政策形成および京都産業大学の建学理念へと再結晶化した過程を可視化する分析装置である。建国大学や総力戦研究所に集積した知的エリートは、総力戦研究の知的遺産、統制経済の制度経験、討議文化などを媒介として、戦後日本の政界・官界・学界に再配置され、そこで新たな政策思想を形成した。本図は、この理念的・制度的変容を単なる影響関係ではなく、『断絶を挟みつつも地下水脈的に持続する「非連続的連続性」』として把握するための枠組を提供している。

さらに、京都産業大学草創期に荒木俊馬、岩畔豪雄、作田荘一、西内雅、岸信介、福田赳夫らが再結集した事実は、同大学が戦前・戦中期の知的実験の延長線上に位置づけられることを示す重要な証拠で

ある。若泉敬がこの系譜の結節点に位置し、先人の思想的影響を受容しつつ、外交実践の知を教育理念へと再構成した点も、本稿の中心的議論を支える。

- <sup>3</sup> 全国紙はもとより以下の新聞各社でも報道された。琉球新報「若泉氏遺書、県に寄贈」、日刊県民福井「若泉敬さん遺書 沖縄へ」、福井新聞「若泉氏（越前市出身）遺書 沖縄寄贈」、京都新聞「核兵器持ち込み『密約』若泉氏の遺書 沖縄に寄贈へ」、神戸新聞「核『密約』後悔つづいた遺書 沖縄へ」、中日新聞「若泉さん遺書 沖縄県へ」、高知新聞「『密約』後悔の遺書 沖縄へ」（以上 2025 年 5 月 27 日付）
- <sup>4</sup> 若泉敬 [1994] (pp.289-290) を参照。
- <sup>5</sup> 『他策』公刊の直後の [1994] 『文藝春秋・六月号』に保阪は論考「若泉敬著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』に記された沖縄返還『核』持ち込みの密約」を寄せている。その後 [1995] 『さまざまなる戦後』で同様の論考を紡いでいる。
- <sup>6</sup> 1848（嘉永元）年、橋本左内は 15 歳の時に、五項目の目指すべき生き方や志を『啓発録』に著す。
- <sup>7</sup> 吉村 [2017] (p.4) を参照。
- <sup>8</sup> 吉村証言は若泉思想の“最深部”を照らす内容である。この証言（吉村への聞き取り調査、2025 年 10 月 10 日、福井市内）が示すのは、若泉の絶望が政治的敗北ではなく、倫理的断絶に由来していたという点である。若泉は「核密約」を暴露しなかったのではなく、戦後日本の主体性欠如を正面から議論する場を求めていたのであり、国会招致は、若泉にとって「日本がまだ自らを問い直す力を持っているか」を測る最後の試金石でもあった。なお当日、筆者は、吉村信二、好川啓一郎、堀川敬部（以上、京都産業大学卒業生）の案内で若泉敬と妻のひなを（福井県初の女性弁護士）が眠る福井県の鯖江市営総山墓園での墓参に赴いた。
- <sup>9</sup> これは、若泉が政治的闘争をしたかったのではなく、歴史に対する証言者として（歴史の法廷に立つ）覚悟を持っていたことを如実に示している。若泉にとって、「語るべきことを語る」ことは、政治的行為ではなく、倫理的義務としての姿勢であったことにほかならない。
- <sup>10</sup> 沖縄県酒造組合 (<https://okinawa-awamori.or.jp/>) によれば、「古酒の定義を以前の規定では、3 年以上熟成させた泡盛が、全量の 50%を超えていれば『古酒』と表記してよいことになって」いたが、現在は全量が泡盛を 3 年以上貯蔵したものに限って『古酒』表示されているという。ちなみに、『どなん』は与那国島だけで造られる希少な泡盛といわれている。
- <sup>11</sup> 「六然」とは出典未詳の語であり（六然の六句は明代以降の処世訓として広く流布したもので、呉澄や崔銑に帰されることもあるが、確実な原典は確認されていない）、人としていかに心を保ち、いかに振る舞うべきかを示す「六つの心構え」の総称である。激動の幕末期における江戸無血開城などの大きな決断に際し、勝海舟はこの「六然」を自らの指針として深く信奉していたという。
  - ① 自処超然（じしょちょうぜん） — 自分のことには執着せず、名利にとらわれない超然とした態度。
  - ② 処人諒然（しょじんあいぜん） — 人と接するときは、春風のように穏やかで和やかに。
  - ③ 有事斬然（ゆうじざんぜん） — 事が起きたときは、ためらわず、きっぱりと決断する。
  - ④ 無事澄然（ぶじちょうぜん） — 平穏なときは、水のように澄んだ心で落ち着いている。
  - ⑤ 得意澹然（とくいたんぜん） — うまくいっているときほど、慢心せず淡々と。
  - ⑥ 失意泰然（しつたいぜん） — 失敗や逆境のときでも、どっしりと落ち着いて構える。

以上の内容は若泉自身の生き方とよく符合しており、それを教え子に伝えようとする熱い思いが読み取れる。「六然」は明代以降の処世訓として日本に受容され、江戸期の儒学・武士道倫理を媒介として、

---

近代日本の修身思想へと連続的に取り込まれた典型例である。

(「ことわざディクショナリ」および寺師 [1996]、会田 [2012] を参照。)

- <sup>12</sup> この「対話」は、一九七〇年六月十日から十六日までの期間にロンドンのトインビー教授宅の応接間で行われた。
- <sup>13</sup> 1967年12月12日に国立京都国際会館でアーノルド・J・トインビーと岩畔豪雄は「二十一世紀の世界」と題した対談を行なっている。岩畔 [1970] は、「去る四十二年の秋にトインビー教授が来日され、私の所属する京都産業大学において講演をされた後に、私は図らずも教授と二人だけで、現代のもろもろの問題について対談する機会を得た。病床を抜け出してのこの対談は一ときの間ではあったが、互いに肝胆相照らし、共鳴するところが極めて多くあたかも百年の知己を得た思いであった。私はそれ以来数次にわたり、書簡によって相互に所見を交換し、ますます親密の度を加えるに到った」(p.421)と述べているように、自らの思索の結果とトインビー思想が響き合っていることが明瞭であり、その傾倒ぶりが窺える。
- <sup>14</sup> 写真はトインビー博士の来日、京都産業大学での講演(1967年11月16日)、国立京都国際会館での講演(1967年11月18日)等の打ち合わせのための荒木俊馬学長、若泉敬教授による表敬訪問。なお撮影は佐藤吉昭(のちに京都産業大学世界問題研究所第四代所長・教授)による。
- <sup>15</sup> J・ウィリアム・フルブライトとは、米国の上院議員であり「フルブライト留学プログラム」提唱者としても著名である。
- <sup>16</sup> 日刊福井「正言」(1982年6月26日付)「戦争と平和—求められる二重の忠誠心—」を参照。なお論考は、吉村 [2017] (p.42) に収録されている。
- <sup>17</sup> 経営学部、法学部、外国語学部の三学部増設記念式典に際し、岸信介元首相が来校。小野良介副学長、若泉敬教授、荒木俊馬理事長兼学長が接遇。撮影者は山本吉男(山本吉男写真場代表)。

[Kyoto Sangyo University and the era of Kei Wakaizumi (V) — A manifestation of independence and self-reliance, and a message for the future — ]

[IWATAKE, Mitsuhiro・拓殖大学専任職員]

[現在の研究テーマ：地域における教育思想の淵源に関する研究]